

私の幼児教育論

XIV

神 沢 良 輔

三 保育の基本 (十二)

—— 幼児とのかかわり合いの中で ——

XIV

ひとりひとりの幼児が、保育の内容を

選択できるようにしてあげる

(1)

幼児とのかかわり合いをどのようにもっていくかということ
は、保育のもっとも基本であろう。しかし、それが保育の内容と
どのような関係をもっているのかということについては、やは
り、いろいろな問題が投げかけられるのではないだろうか。つま
り、幼児の毎日の活動というもの（保育内容といってよいであろ
う）を、幼児とのかかわり合いの中で、どのように位置づけてい
けばよいかということである。

たしかに、幼児を保育するということは、幼児に望ましい活動

をもたせ、保育のねらいを達成させることであろう。そのために
は、幼児のとりくむ活動は幼児の発達にみあったものでなければ
ならないし、保育者には、そのような活動の発達ということを予
測したり、理解できているということが要求されよう。このよう
な側面からみると、保育内容を構成して、保育計画とか指導計画
をどのようにするかということが前面にでてくる。

いうまでもなく、幼児の発達や、幼児の活動についての発達を
見通して、しっかりとした指導計画をたてて指導すること
はたいせつであろう。しかし、それで保育ができるということに
ならないことはいうまでもない。そこに幼児とのかかわり合いの
基本的な課題があるのではないだろうか。換言すれば、幼児は保
育者とのかかわり合いの中で安定感を持ち、自己を実現すること
によって発達しているということになるからである。

(2)

そこで、私の見学したある幼稚園の保育についてみていくことにしよう。

その幼稚園は、園庭の広い幼稚園で、幼児たちはとても元気に遊んでいた。楽しく見学していると、十時頃になると、四歳児が保育室に集合しはじめた。そこで、何が始まるのかなと興味をもつてみると、間もなくしてテラスの前まできた。そして二列に並んで、保育者が何かかごのようなものをもって、先頭に立つて歩きはじめた。

しばらくは、どうしようかと幼児たちの去っていくのを見守っていたが、なんとなく気になるので、幼児たちの後を追っかけることにした。すぐに幼児たちの列に追いついたが、急に列の流れがおそくなった。そこには、園庭の中を横切っている道路があり、横断歩道のしるしがしてあった。

私が追いついた時には、ちょうど列の半分ぐらいの幼児が渡りおわったところであった。保育者は、横断歩道を渡りきったところで、つぎつぎに渡ってくる幼児たちの列を整えながら、手をあげてくる幼児たちの横断歩道の渡り方に注意を払っているようであった。

そのうちに、ささやかなトラブルがおきた。幼児たちの列は、背丈の低い方から順次並んでいたようで、列の後半には、身体的

に成長の大きい幼児たちが残っていた。

そのような幼児たちのひとりが、手をあげずに、いささかふてくされたように肩を左右にふりながら、ゆっくりと横断歩道の上を歩いて、横切っていた。もちろん保育者は、このようすを、幾分困惑びにみていたが、渡り切るとその幼児に近づいていった。保育者と幼児との会話は聞きとれなかったが、もう一度やり直すように話をしたのでろうか、その幼児は、横断歩道をやはり手をあげずに不満そうな顔をしてもどってきた。この間に少しの幼児たちは、手をあげて渡っていたが、そのようすをみていた残っていた幼児たちは、この幼児の行動に対して、決して否定的に受けとめているようには思われなかった。むしろ、一部の幼児たちの中には、肯定的な態度さえ示しているように思われた。

このようなことで、その幼児のつぎの行動に影響を与えたかどうかはわからないが、この幼児は、やはりはじめにたと同じ行動でまた横断歩道を渡っていった。もちろん保育者はこのような幼児の行動に対して、否認的な態度をとっていたが、あまり効果はなかったようだった。

そこで、保育者は、もう一度横断歩道の渡り直しを幼児に求めた。その幼児もしかたなく、もう一度もどってきたが、この時には横断歩道に残っている幼児はいなくなっていた。ひとりになっ

で幾分さびしそうな、てれくさそうな顔をしていたが、この幼児は横断歩道を渡る態度は変えなかった。

保育者の否定的な態度はさらに強くなつて、幼児に再度、きちんと手をあげて渡ることを要求したようであつたが、急に幼児の行動は攻撃的になり、保育者を足でけとばしはじめた。保育者は、いたわるようにして幼児の行動を受けとめていたようであつたが、幼児は遂に泣きじゃくりながら、攻撃的な行動をくり返していた。幼児は保育者にだきかえられて、やがて攻撃的な態度も低下していった。

それとともに、幼児たちの列は整えられ、再び集団の行動がはじまつた。

(3)

幼児たちの行き先は、“砂遊び場”であつた。広い砂遊び場に着くと、保育者は、その周りを幼児の列をひきいてぐるりと一周した。すると、幼児の列が、うまく砂遊び場をとりまくようになつていった。保育者はそこで幼児たちを坐らせて、自分のもつていた“かご”を、砂遊び場の中に置いた。その中には砂遊び用のプラスチックのスcoopがいっぱい入つていた。

つぎには、幼児たちの靴をぬがせ、それを砂遊び場からすこし

離れたところに、きちんと置かせるとともに、その中にぬいだ靴下を入れさせた。そしてもとの場所へ坐らせた。幼児たちは、素足の感触が気に入ったのか、足をさかんと動かしては満足そうである。

保育者は、スcoopをひとつずつ幼児にくばってから、砂遊び場でスcoopを使って遊びましょうと指示した。幼児たちは、裸足で喜んで、砂遊び場の中に入つていった。最初は、スcoopで砂を掘つていたが、しだいに掘ることだけではものたりなくなつて、砂遊び場の中を走り出す幼児もでてきた。そのうちに、砂遊び場の近くにある水道の蛇口をみつけた幼児は、得意になつて水を出し、手で砂遊び場の中に運ぼうとした。

保育者は、砂遊び場の外で、幼児の行動を立つたまま観察していたが、やがて幼児が水道の所へいったのをみて、その近くにいったので、どのような援助をしてあげるのかと思つてみると、そこにいた幼児たちに、やさしい声で“今日は、水道は休みなの、スcoopだけで遊ぶのよ”といっている声が聞こえてきた。幼児たちは、残念そうな顔をして、また、砂遊び場にもどつてきた。

(4)

この保育は、私には、とっても印象に残つたので、すこし記述

が長くなったがお許しいただきたい。

確かにこの保育は、保育者の意図とか、ねらいとか、一般的な配慮とかいうことからみると、きわめて立派な保育だということができる。

つまり、横断歩道のところでは、手をあげて渡るということを重ねたのであろうし、このような基本的な生活習慣については、例外なく、くり返しの中で指導することは正しいことであろう。

また、砂遊びの指導においては、スコップで砂を掘るということとをねらいにして、すべての幼児に同じ経験をもたせようとしたのである。靴や靴下の整理のしかたなどはきわめてうまい指導であり、とくに素足にして砂の感触を楽しませるということなど、すばらしい配慮である。

しかし、この保育は、なにか指導計画にもとづいて、それを展開していくことだけが前面にでて幼児とのかかわりということとで欠けているように思うのである。すなわち、保育者の側からみると満足できる保育であり、その意味において理解できるが、幼児の側からみて十分に満足すべきものであったか、ということについて、多くの問題を残しているように思われるのである。つまり、保育者の側にとって、綿密に意図されたものが、幼

児にとってどのような意味をもつものだろうか、ということでもある。

換言すれば、保育者は指導計画の管理ということに集中しているようで、このような中では幼児としてのほんとうの活動はできないのではなからうかということである。幼児の中には、自動車の走っていない横断歩道を、手をあげて渡る意味に疑問をもつものもいるだろうし、砂遊び場では、水を使って遊びたいという衝動にかられるであろう。

もちろん、ここに示した幼児の行動が、このようなことだけが原因であるというようにいえないことはいうまでもないが、やはり、幼児にとって、もっともたいせつなことは、ひとりひとりの幼児が保育者に認められているという実感の中で、自己を思う存分表現できるということではないだろうか。

そのためには、指導計画をたてることは必要ではあるが、保育場面においては、保育の内容は、決して幼児にそれを強要すべきではないし、また強調するべきものでもないであろう。保育の内容は、保育者とかかわり合いの中で、幼児が自由に選択できなければならないということがやはり、保育の基本にあるのではなからうか。